

閃光の中へと

てんぞー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦場の輝きは美しくも切なく、そして毒々しい。

目次

ルウム戦役	1
第一降下作戦	12
アフリカ戦線	23

ルウム戦役

光が瞬いては消えて行く。

そんな地獄の中を自分も駆けている。

手足の代わりに動くのは巨大な鋼鉄であり、動力炉が心臓の代わりに力を鋼鉄の体へと送り込んでいる。何度も触れ、そして訓練してきた動きについてくるように、操縦桿の動きに鋼鉄の体がついてくる。バーニア調整、出力のチェック、バランスー、全てを確認しながら機体を動かす。複雑な機械の機構は覚えるまでに非常に苦労したが、それでも積み重ねてきたものは決して裏切らないと理解している。だからヘルメットの下面で深呼吸を繰り返しながら、機体を——ザクを動かす。

ザクが入力に応える。ワイヤーという神経を通して全身に指令を送り込みながら反応するザクは宇宙という広大な上下の存在しない空間を自由にそのバーニアを利用して泳ぐ。宇宙における移動で燃料は使い切つてはいけない。その事を念頭に置き、消費量が少ない様に一瞬だけブーストを連続で放つ事で細かい加速を重ね、それでスピードを徐々に上げて行き、慣性に任せてザクを移動させる。正面には宇宙に浮かぶ戦闘機の姿が——セイバーフイツシユの姿が見える。その姿を見て憐れむ。

「可哀想に——なんて同情するのは間違っているな」

四機で編成を組まれているセイバーフィッシュ、これが旧来の状況であれば、間違いなくピンチだった。だが違う、時代が変わってしまった。冷静にザクに握らせている二つのヒートホークを構えながら正面から囲む様に散開したセイバーフィッシュをモニターと気配で捉え、即座に一番手身近かなセイバーフィッシュへとヒートホークを一つ、投擲する。ヒートホークが突き刺さったセイバーフィッシュが一機爆散し、ヒートホークの柄に結び付けていたワイヤーを引き戻し、手元に武器を引き寄せながら、放たれてくる三機の機銃での攻撃を回避する。宇宙空間という三次元的な動きが出来る環境である為、隠れる事は出来ないが、逃げる事は容易にできる。

「はあ、はあ、はあ——」

動け、動き続ける。宇宙空間では動きを邪魔するものはない。故に止めようと思わなければ、何時までも機体は動き続ける、何かにつつかるまでは。だからそれを利用し、常に動き続ける。スラストとバーニアを利用して微調整を行いながらザクをオーバーヒートさせない様に熱量を注意しつつ慣性と瞬間加速による回避を行い、射線を確認するセイバーフィッシュ、その進路の上に設置する様にヒートホークを投擲し——再び

「残り、二機——」

息を吐きながらザクを動かす。止まったら相手が雑魚であろうと殺される。だから絶対に動きを止めてはいけないと、教官が教えてくれた。それを実践する様に速度を落とす事無く移動し、迫ってくるセイバーフィッシュを回避しながらその横から蹴り飛ばし、離れた位置でヒートホークを投擲して回収し、最後のセイバーフィッシュも同様に処理する。四機である間は警戒する必要があるが、数が減ればそこまで恐ろしくはない——ザクの方が強いからだ。

「ヒートホークで戦っている間は弾薬が節約できるな」

乱戦に突入して補給が難しい今、なるべく弾薬は節約しておきたい——元から格闘戦の方が上手い。そこまで心配したものではないが……それでも一緒にいた仲間が被弾して下がった結果、こうやって前に出ているのが自分のみとなると少し寂しく、怖くもある。いや、この戦場には自分と同じように戦っている多くの仲間がいるのだ、決して一人ではない、一人で戦争は勝てないのだ。息を吐き、呼吸を整えながらヒートホークを格納し、そして背に背負う様に装着してあるバズーカを手取る。ジャミングが酷くて通信が通らない——セイバーフィッシュの残骸を超えた先には連邦の戦艦が見える。システムのロックを使えば相手に気取られる。故に周りに浮かんでいるデブリの影に隠れながらザクバズーカを背負い、

そして目測で照準を合わせ、引き金を引いた。

バズーカから放たれた弾頭が宇宙空間で遮られるものもなく、悠々と戦艦へと向かって突き進む。その光景を素早く離脱する様に動きながら眺める。迫ってくる弾頭に気付いた戦艦は直ぐ迎撃を開始するが、それでもそれには遅すぎた。弾頭の有効圏内に入ってから迎撃された弾頭は爆裂し、そして破壊の光を宇宙に生み出す。一気に空間を喰う様に広がる光は逃げ出そうとする戦艦を飲み込み、そしてさらに広がって行く。その光が更にセイバーフィッシュ等を飲みこんで死を広げる姿に、息を吐く。

「また死んだ、いっぱい死んだ……ああ、殺したな……」

バズーカを背中の中のラッチへと戻し、そして再びヒートホークを握る。核弾頭による破壊はこの戦場での最強の兵器だが、無差別に破壊を巻き起こす所がスマートではなく、好きじやない。だからこれに頼るのは戦艦を落とす時のみ、と決めているが——どうなのだろうか、一体何隻沈めたのだろうか？ 何人殺したのだろうか？ どれだけ死んだのだろうか？ 序盤は数の問題で押され気味だったが、今となっては数はイーブン、そして確実に性能差で此方が押し込んでいる。このまま押し込めば確実に宇宙の覇権はジオンが握る事になる。それを確信させる流れが出来上がっていた。

だから戦い続けなくてはならない。

兵は死地へ。

死中に活あり。

「見つけた……マゼラン級戦艦だな。敵だ」

ヒートホークを格納し、バズーカを背負い直す。が、今回は相手に捕捉されたくなく、迎撃放火が此方へと向けられ、セイバーフィッシュの出動も見られる。この状況でバズーカを放てば自分もまきこまれる。舌打ちしつつバズーカを戻し、そしてヒートホークを二つとも握る。そのままバーニアを吹かし、更に加速しながらマゼラン級戦艦へと向かつて接近する。此方へと向けて放たれてくる迎撃放火、それには死角が存在する。戦艦の下部は表層部よりも比較的になんかなくなっている為、そこへと回り込む様に大きく回り込む。追いかけてくる様についてくるセイバーフィッシュの姿を見て、ここが弾薬の消費どころだと判断する。左手のヒートホークを格納しながらマシンガンを手に取り、一切速度を落とさないまま、弾丸を後方へとばらまく。後ろから迫ってくるセイバーフィッシュにそうやって牽制しつつ、正面のマゼラン級戦艦へと一気に接近する。

「そこだっ！」

核弾頭の爆破範囲に入る。これで自分が死んでも、核爆破で諸共殺せる。そう思うと少しは心が楽かもしれない。そう思いつつ一気に上昇する様に踏み込み、セイバーフィッシュを振り切りながらマゼラン級の正面へと回り込み、迎撃を振り切りながら艦橋を目視する。

「落ちろ」

片足を甲板の上に乗せ、ヒートホークを投擲しながら全力でワンステップを取る様に甲板を蹴り、跳躍する。その跳躍で更に仮想しながらヒートホークをワイヤーを引つ張る事で回収し、手元へと戻す。艦橋へと視線を向ければ、完全に破壊されたマゼラン級の艦橋が見え、もはや迎撃の放火は放たれてこない——指揮の人間が死んでいるからだ。これ以上攻撃を加え、無駄に殺す必要もない。跳躍から得た反動でザクが更に加速する。そこから発生するGが体に襲い掛かるが、他人よりは体を鍛えているという自負がある。それに任せ速度を緩める事無くバズーカへと握り替え、セイバーフィッシュから逃げる様に飛翔する。

「追って来るなら仕方がない、か」

速度を殺さない様に気を付けながら振り返り、左手で握ってるマシンガンを放つ。ばらまく様に放ったそれをセイバーフィッシュが回避し、即座にマシンガンを放棄しながらヒートホークを投擲し、それを突き刺して破壊する。そうやって追っ手を破壊しつつ、再び武装を回収し、次の獲物を求めて更にさまよい、叩き続ける。

「ふう……ふう……部隊の皆はどこだっけ……他の皆はどこだ……」

見えない。味方はどこだ。はぐれた？ いや、違う、そういうえば皆沈んだんだった。何処かと合流しなくては。一人で戦っていても生き残れない。今はまだ燃料も弾薬もあるがいいが、叩き続ければその内戻れなくなってしまう。その前にどこかの部隊と合

流したい——あるいは一番派手に争っている所へと突っ込むのも悪くはないかもしれない。生き残りたい。敵を殺さなくてはならない——功績も必要だ。功績があればある程度は自由が得られるのだから。

「沈んだ分も……戦わなきゃ……」

功績がなかったら今の様に、孤独に死ぬまで戦い続けるのみだ。

だから、戦い続けなくては。更に戦艦を落とす。全ての戦艦が消え去るまで、敵が地平から消え去るまで叩き続ける。

「敵は……敵はどこだ。もっと戦わなきゃ——」

敵を求める。修羅である事を否定しない。戦いを拒否しない。敵を求めて、そして合流できる部隊を求めて宇宙空間を飛翔すると、獲物として破壊しようと思ったサラミス級巡洋艦に赤い姿が取りつき、一閃で艦橋を破壊し、そして離れる姿が見える。自分よりも遥かに洗練され、そして美しいとも評価できる一連の動き、それを見て思わず動きを止める。

『此方シヤア・アズナブル中尉。どうやら獲物を奪ってしまったようだな』

何時の間にか赤い機体——赤いザクの視線は此方へと向けられており、そして通信が繋げられていた。は、つとしながら思考を動かす。相手は上官だ。失礼のないようにしなくてはならない。

「ハッ！ 此方ムカイ・ユウ曹長であります！」

『一人の様に見えるが作戦行動中か？』

「いえ、恐らくは自分を除いて仲間は沈んだようです。連絡も出来ないのどこかに合流しようかと思っております」

『成程。ならば私と来るが良い、これから連邦の戦艦を落とすに行くぞ』

「ハッ、了解しました！ これよりアズナブル中尉の指示に従い、行動します」

『そう硬くなる必要はない……行くぞ』

シヤアに従う他のザク——つまりはザクIIに従い、宇宙空間を飛翔する。狙うのは勿論連邦軍の主力となつているマゼラン級戦艦とサラミス級巡洋艦。これを潰せば潰す程ジオンの有利に戦況が傾く。故に見かけたサラミス級巡洋艦へと、一気に接近する。

『切り込む、援護は任せただぞ』

『了解しました』

他の隊員と声を合わせて返答し、牽制にマシンガン抜き、セイバーフィッシュがシヤアのザクへと接近できないように弾幕を張る。だが、そんな事は元からする必要はない。視界の中、スクリーンに映し出されるシヤアの動きは圧倒的だった。まるで頭の後ろに目がついているかのように弾丸を回避し、最小限の動きで回避しながら一気に接

近し、そのまま滑るように甲板の上を移動しつつヒートホークで艦橋を両断し、一瞬で離脱する。あまりにも鮮やかすぎるその手並みはもはやだれの援護も必要ない—— たった一人で戦艦の巡洋艦も鎮める事の出来る、この戦場のエースである事を証明する動きだった。

「お見事です中尉」

『少々派手が過ぎたかもしれないがな。戦場の推移が気になる。どこか大きな部隊と合流する』

「ハッー」

頭の奥にこびり付く敵を殺せと言う上官と同僚達の声を振り払いながら、シヤアに従って宇宙を飛翔して行く。その瞬間も大量の光が瞬き、命が流れる様に失われて行く。ここは戦場、ジオンと連邦軍が命を懸けて戦う戦場。数で圧倒的に勝っている連邦を倒す為には、ジオンは、手段を選べない。この戦場における大量の核弾頭の投入もそれが理由の一つだ。モビルスーツの圧倒的機動力に核弾頭を与えれば、簡単に地獄が生まみ出せる。

その結果がこれだ。

果たしてこの光景は正しいのだろうか？ いや、正しい訳がない。だが軍人にそれを考える事も問う事も許されはしない。軍人に求められている事は黙って敵を殺す事だ。

そう、魂から肉体まで、全てを機械にして、そして敵を殺し続ける——それだけが兵士に求められる事だ。

「中尉……人は……死んだらどこへ行くのでしょうか」

『さてな、すまないが私は宗教家ではなくてな。だが間違いなくここよりも酷い場所であると私は確信しているよ』

「それは……」

『この様な光景を生み出す人類の行く先だ、それが楽園であるわけがないだろう』

確かに、それはそうだ。

死んだら天国へと往けるなんて——なんて、甘い幻想なんだ。結局は人間が生み出した想像ではないのだろうか？ いや、それすらも死の先へと進まなくては解らない事だ。そしてそれは、知りたくもない事だ。まだ死にたくない。まだ殺し足りてない。まだ、まだ戦わなくてはならない。

殺した分も、

殺された仲間の分も、

その分生きて、生きて、そして戦い抜かなきゃ駄目なのだ。

きっと、それが兵士の役割なのだ。

『中尉、一時の方向からサラミス級巡洋艦が』

『行くぞ』

「ハッ、了解しました」

考えるのは後回しだ。頭と体にこびり付く戦友たちの怨念を背負いながら、

戦場を駆ける。

ここはルウム——ルウム戦役。

ジオンと連邦軍の戦いはまだ始まったばかりであり——きっと、これはまだ地獄の幕開けでしかない。

誰もが強い心を持っているのではない。誰もが心に恐怖と葛藤を抱えている。まだ戦場はここではない。だがすぐそこまで来ている。故に既に心は出来上がっている。何時でも戦場に出て敵を殺せるように脳はスイッチを切り替えてある。宇宙と地上では全然動きが違うと聞いている。その為の訓練は既に終わっているが、それでもこうやって降下して行くH L Vの中で、しっかりと重力が体を引っ張る感触を感じられる。そう、今、母なる星と呼ばれる地球にこの体は引かれているのだ、地上へ、落ちる様に、確かに近づいているのだ。だがこのまま衝突する事はない。戦友が言ったように、まだジオンは発見されていない。地上の偵察部隊によると相手はまだ此方の降下を確認していない。つまりは完全な奇襲アドバンテージを獲得できるという事だ。

『死にたくない死にたくない死にたくない……』

『うるせえよ!! 少しは准尉を見習えよ!! なんか言っちゃってやってくださいよムカイ准尉い!』

准尉……准尉、そうだ、そういえば自分が准尉だった。あの戦場で、ルウム戦役で戦艦を二隻、一人で沈めた実績が認められて准尉に上がる事が出来たのだ。あと三隻一人で沈めればきつと、少尉にまで上がったのかもしれない。だがあの後はずっとシヤア中尉——いや、今はシヤア少佐と一緒に行動したからそれは無理だ。あの激しくも華麗な動き、アレをずっと追いかけ、そして学ぶように並び続けたのだ。美しかった。シヤ

アの操縦技術は自分とは違う、クイツク&スマート、スピードで相手を攪乱する動きだった。自分には永遠に無理な動きの為、憧れるものがあつた。いや、憧れたのだ。自分もあんな風に戦いたい。またいつか、一緒に肩を並べて戦いたい人だった。

「……誰だつて怖いし、死にたくない。死にたくないと言つていても死ぬときは死ぬ。それはどうしようもない。それに戦いたくないと逃げれば仲間には殺されるだけだ。だったら、死にたくない」を。死にたくないから敵を殺す。にでも変えてればいい」

『死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない……』

『あー……ダメつすわ、こいつ話を聞いてねえや。すませんね、ムカイ准尉。こいつ、新兵らしくつて』

「誰だつて新兵だつた時がある。それに、俺も怖い。気持ちには解る」

『ほえー、准尉がですかあ、いやあ、意外つすなあ』

「まだ二十歳前のガキだしな」

『へえ……え？ えっ!?』

何が意外なのだろうか。怖いのは当たり前だ。未だつて体が震えそうなほど怖い。それでも戦場に立つと恐怖と共に戦友たちの怨念が体を縛るのだ。心に嘔きかけてくるのだ。殺せ、殺せと。殺意を胸に抱いている間は震えない。戦意で血がたぎっている間は疎む事はない。生き残ろうと全力で頭を動かしている間は考えに詰まる事もない。

戦場を通して増えて行く戦友たちの言葉がこの体を生かし続けている。だったら、死ぬ、その瞬間まで叩き続けるしかない。怖くても前進し、敵を殺すしかないのだ。

『余計な言葉はそれまでだ貴様ら！ 着陸するぞ！ 備えろ！』

上官の声が響く。通信から意識を外して着陸の衝撃に備える。H L Vの落下が少しずつ、少しずつ緩やかになって行くのを感じつつ、最終的に着陸の衝撃を感じる。ゆっくりと開き始めるH L Vのハッチの音を認識し、今まで切っていたザクIIを起動させる。鋼の心臓が動き出す、ザクIIの体に活力が満ちる。敵を殺すぞ、と心の中でザクIIと過去の戦友達に語り掛け、そしてスクリーンを通してH L V内を確認し、他のザクIIに合わせる様にH L Vから降りる。

歩く感触は宇宙空間での飛翔とは全く違う。

宇宙での動きは極論、グライダーに乗ってグライドするのと全く変わらない。一回の加速で止まるまで、ぶつかるまでずっと飛び続けるものだ。だが地上での動きは違う。重力があるから常に足元に足場があり、そしてスラストから噴射しなくても重力と大地の楔がある為、切り結んでも体が後方へと押し出されることがない。その為、地上でのモビルスーツの運用は常に重力との戦いだ。跳躍すればその反動が帰ってくる。一回の加速ですつと速度を維持できるわけではない。宇宙と地上の戦いはまるで違うのだ。

故に何度も訓練したように、ザクⅡを操作し、前へと踏み出す。

操縦桿を通してザクⅡと体を一体化させるように動かす。持ち上げて前へと踏み出したザクⅡの足がH L Vの床を踏み、そしてタラップを通して外へと出て、

——地球の大地を初めて踏む。

前へと踏み進むのを止めずに、後続が出れる様に更に踏み出し、他のザクⅡが集まっている地点へと近づく。その度にザクⅡが歩くときに発信する振動、感触を体で感じる。宇宙空間ではありえない、歩いた時の反動。それは宇宙では重量がない事とほぼ同義であるために発生しない現象だ。今、自分は地球という星の上に立っているのだ。多くの戦友達が成す事が出来ずに散ったその感触を、こうやって自分はザクⅡを通して感じる事が出来るのだ。軽い感動を胸に感じつつ、他のザクⅡの様に並び、そしてこの作戦の指揮官へと機体のカメラを向けた。

現在地はバイコヌール基地の南東にあるバルハシ湖の更に小、南といった地点であり、自分達第一機動師団が降下した地点となっている。既に先発隊や偵察隊も集まっております、戦闘用に他のザクⅡが換装を終わらせてある。その中でモビルスーツに乗るわけでもなく、上級士官用の軍服に身を包む、金髪の青年の姿が見える。まだ若さの残る顔立ちの青年は彼の前に揃う多くのジオンの兵士を眺め、確認し、そして頷く。口を開き、

発する言葉はモビルスーツに内蔵されている集音器を通してキャッチする事が出来る。

「——良くぞ来てくれたジオンの戦士たちよ！」

ガルマ・ザビの声が響く。

「我らはこれより北上し、バイコヌール基地を落とす為に行動を開始する！　しかし焦る事はない！　偵察によればバイコヌールには戦闘車両や戦車は配備されてあつても、未だに警戒している様子は一切ない！　今、この場には220機のモビルスーツが揃っている！　この地上という環境であつても、モビルスーツを保有する我々の優位は崩れない！　行くぞ同士達よ！　未だに現実を理解しない連邦にジオンの恐怖を叩き込むのだ!!」

「おおおおおおお——!!」

「それでは作戦を開始する！　進軍せよ！」

咆哮に合わせる様に指示が飛ぶ。それにしたがつてザクⅡを動かす。ラッチに装着してあるバズーカ、マシンガン、そして二つのヒートホークを確認する。今でもシヤアのあの動きは記憶の中に残っている。その結果、やはり自分は近づいて切る事に魅せられてしまったと思つている——だからと言つて何かでいる訳でもないが。そうなる と上官達が羨ましい。少尉ともなれば、自分の搭乗しているモビルスーツを改造する許可を得られるのだ。そうしたら自分も、もっとザクを近接戦に長ける様に改造を頼むの

に。

だが今はF型に乗るしかない。それを念頭に置き、地上戦は遠距離からマシンガンとバズーカで近づく前に潰すのが常道であると理解し、第一機動師団に合流し、戦友達と共にバイコヌール基地へと向かつての北上を開始する。二百を超えるモビルスーツが大地を踏みながら前進する姿は歴史上、これが初であり、

そしてこれから何度でも起きるであろう出来事でもある。



そして軍の動きが始まる。200を超えるモビルスーツ、300を超える先頭車両、3000を超える兵員。それを以って北へ、バイコヌール基地への進軍が始まる。度重なる偵察によって既にバイコヌールの警備は通常のものであると理解されている上に、連邦軍ではジオンの構成はもつと、もつと後、つまりは数か月後に来るだろうと予想されていた。故に連邦軍に察知する事は不可能だった。車両ではなく人の形をした高機動の機械兵、モビルスーツ。それを保有しない連邦は、地上におけるその恐怖を一切知らないまま、

そして、地上で最初の戦いが始まる。

——命令が出るのと同時に前へと飛び出す。

バイコヌール基地に存在する多くは戦車であり、戦車兵である。モビルスーツは隠れる事に適してはおらず、バイコヌール基地から数キロ先でも目撃が出来る。その為、奇襲を実行する頃には相手はある程度察知しているが、それでも奇襲である。完全な準備ができておらず、戦場に出ているのは半数以下、100車両近くの戦車だけだ。それを目撃し、戦友達がマシンガンを握る中、迷う事無くヒートホークを二つとも取り出して握り、動力をヒートホークへと繋げる。ザクⅡと繋がった事でヒートホークの機能が稼働し、相手を焼き切る事が出来るようになる。それを理解しつつ、

ザクⅡを前へと走らせる。

シヤアのあの華麗な動きが頭からこびり付いて離れないが——自分は彼ではない。一歩踏む事の大地が揺れ、震動がザクⅡを通して体全体へと伝わる。主機やワイヤーが、操縦桿がそれに震えるのを感じつつ、魂を込める様に強く握り、睨み、戦友たちの連邦への怨念を感じ、前へとザクⅡを飛ばす。そのまま前方に見える戦車へと向かって、

跳躍する。

戦車の放った砲弾を完全に飛び越え、持ち上げた右手のヒートホークを空に見える戦闘機へと向かって投擲し、破壊しながら戦車の上へと着地し——無情に踏み潰す。大地を揺らす感触を得ながらザクⅡの体に負担を与えない様に、衝撃を逃がすように足首、膝、股関節と曲げながらフレームに衝撃を分散させ、戦闘機に突き刺さって落ちたヒートホークを巻き付けたワイヤーを引っ張る事で手繰り寄せ、飛んできたそれを片手で掴む。

「殺す、敵は……殺す」

バイコヌール基地の守備兵は数が少ない。当たり前だ。奇襲が成功しているのだから、相手は準備を整えるだけで忙しいのだ。だから要所さえ押さえたまえば、ここはあっさり陥落し、オデッサへのルートを構築するのに使える。だから仲間がそうやって抑える事を成功させるように、敵を、出ている敵を潰し、道を開くしかない。

『じゅ、准尉!』

「跳べ。砲弾には当たらない。ただ仲間の射線に入らないことだけを気を付けろ」

『りよ、了解です! ありがとうございます!』

『ハッハー! 入れ喰い状態だあー!!』

『喰らえ連邦軍どもめ!!』

『殺せ殺せ！』

怨嗟と怒号が響く戦場の中で、次の戦車と航空機、戦闘機を見つめる。シヤアは確か——そう、踏んだ甲板を蹴り、それを加速しながら戦っていたのだ。シヤアの三倍速、それはただの機体のスペックではなく、宇宙空間における減衰が起きない事を利用した、加速から加速を利用した速度の維持という技術だ。宇宙空間と違って、地上は邪魔なものが多いが、似た様な事は出来る。強く、強くならなきや生き残れない。だったら盗める技術、そして行える改造や強化はなるべくやらなくてはならない。

勤勉ではないとならない。
故に、

「死、ね……い！」

跳躍し、ヒートホークを振り下ろし、空を飛ぶ戦闘機を切り裂きながら戦車を踏み潰し、そのまま次の戦車へと向かって跳躍し、踏み潰す。マシンガンなんてもので狙うのは面倒だし、上からザクⅡの体重で踏みつぶしたほうが早い。故にそれを実行し、此方へと砲塔を向ける戦車を潰し、中の人間を殺す。

「殺す！ 殺して殺す！ また殺す！」

進軍する。ザクⅡで戦車を、地球の大地を踏み荒らしながら進む。

ジオンと連邦の戦いは始まったばかりだ。

だが一方的に陥落し、死んで行く命を見れば解る。
地球全土と宇宙を舞台に開かれるこの戦争——地獄しか先には見えない、と。

アフリカ戦線

ザクⅡが大地を踏みしめる。この感覚にも大分慣れた。

『准尉！ 先行し過ぎだ！ 被弾するぞ』

「問題ありません。敵を殺します」

応えるのと同時にヒートホークを投げつけ、戦闘車両を破壊しつつ、それに繋がるワイヤーを引き、空を飛ぶ戦闘機を薙ぎ払う様にヒートホークを振るい、手元に引き寄せた。その間でも常にザクを動かし続ける。動いを止めてはいけない。それが戦場だ。シヤアもそうだった。常に動き続け、そして決して止まることなく戦い続けていた。戦場という場所は止まった者から殺しに行く。だからこのザクⅡは、己の体は、止まってはいけない。止まればその瞬間に戦友たちの怨念が殺しに来るから。戦えない戦友に意味はない。殺して前へ進めと、そう囁かれる様に、前へと進む。やる事はオデッサの侵略、バイコヌールの時と変わらない。

戦闘車両を跳躍し、踏み潰す。左手はヒートホークではなくマシンガンを握り、右手にはヒートホークを与える。弾薬の節約ばかりを考えてしまう貧乏性である為、常にヒートホークを投擲する事ばかり考えてしまうが、今回の連邦軍基地アデンへの進行

は、既に外人部隊第三連隊が強襲しており、そして壊滅している。その為、アデン基地の警戒はあのバイコヌールの時と違い、最大限に警戒されており、敵は準備をしてある状態にある。それでいい。そっちの方がたくさん戦える。だから通信機を通して聞こえる戦友の声よりも、戦友の怨念に耳を傾ける。

『殺せ——』

『俺達を殺した連中を——』

『コロセ——』

「殺す。死にたくなかったら——殺すしかない」

シンプルで、この世で唯一の法則。敵は殺せば動かない。

——だから、殺す。

戦車を踏み潰しながらザクⅡが大地を疾走する。ザクⅡの足の裏を通して硬質な感触を感じ取りつつも、頭上から襲い掛かってくる戦闘機を最大限警戒する。現状、ザクⅡを破壊する一番効率的な方法はコクピットへの攻撃であり、戦闘機の積んでいるミサイル等がその強になる。戦車自体は砲弾が撃てる範囲が決まっているという事と、尚且つ速度と小回りにおいて決してモビルスーツに勝てないという事もあり、そこまでの脅威ではないのだ。やはり、空を飛べないモビルスーツにとって、空の相手が一番恐ろしい。

だが、それは後ろに置いて来た部隊の戦友達が対処してくれている。故に、自分は前に出る。ザクⅡのコックピット内に溢れ出るロックオンアラートはマシンガンで弾幕を張る事で対処する。適当にこうやってばらまけば、正面からのミサイルは弾幕で潰せる。だから一切振り返る事も止まる事もなく、そのまま前へ、前へ、機銃による射撃をザクⅡの体に掠らせつつも、前進する。

もはや踏み潰した戦車の数は覚えていない。バズーカは誤爆されると厄介である為、既に捨ててある。機動力をウェイトを捨てる事で増してあるザクⅡの動きは戦闘機でもないのと止められず、戦車ではどう足掻いても止められない。だから軽く踏み潰して突破する。既にアデン基地は目と鼻先まで来ている。しっかりと戦友達はついてきている。ならば大丈夫だ。今まで小出しにする事で温存していた推進剤を、推進器に一気に叩きこんでブースターをフル稼働させる。加速を一瞬で叩き上げ、ザクⅡの鋼の体を前へと飛ばす。瞬間的に体にかかる凄まじいGを食いしばって耐え、ザクⅡがオーバーヒートしない様にブーストを出しっぱなしにせず、瞬間的に超放射で爆発的に前へと飛ぶように跳躍する。その瞬間的な速度は戦闘機に匹敵するものがあり、完全に止める事が出来なくなっている。だからそれに任せて前へと進む。

そして一気にアデン基地へと踏み込む。本来は存在するはずの監視塔屋設置された機銃なんかは、前に襲撃した外人部隊が壊滅するのと引き換えに破壊してくれた。つま

り、今、この領域は完全に自分の間合いだ。司令塔がどこかは解らないが、発進しようとしている戦闘機や戦車は解る。所以いヒートホークを投擲し、入り口をふさぐように叩きつけ、これ以上発進できないようにする。そのまま一際高く辺りを監視するようにそびえる監視塔をマシンガンで射撃する。

『良くやった准尉！　だが後でお説教だこいつ！』

『クソオ！　一番乗りを取られた!!』

『まだだ！　まだ連邦連中が抵抗している！　今なら戦功を稼げるぞ！　名を上げてめえら！』

基地へと乗り込んだ此方へと続くように後続の戦友達が基地へと入りこみ、そして基地を占領し始める。

もはや連邦に勝ち目はなかった。次々と基地に侵入するザクⅡの姿に対して行える反抗はもうなかった。基地という入り組んだ場所で戦車は全く動けず、小回りが利くモビルスーツ相手にはほぼ無力に近い。ここに至るまでの道は虐殺で溢れていたが、到着し、そしてヒートホークを各種施設へと向ければ、完全に連邦の動きは停止する。

——アフリカ戦線へと続くアデル基地はこうやって落ちた。



「貴様は死にたいのか!!」

作戦が終了し、次の出撃までの間、上官に呼び出されたと思えばそう怒鳴られた。アデル基地で一泊してから西進してから更に南下、カイロへと向かう予定である為、次の日は割と早く移動を始める。既に後続の部隊がアデル基地を抑える為に到着しており、自分達第一機動師団分体が離れても問題がない様になっている。明日への準備を進めている中で、上官に呼び出されたと思えばこうだ。理由が解らない。何故こんな風にならなくてはいけないのかが分からない。目の前にいる上官は拳を握り、怒鳴ってくる。

「前の時もそうだが、貴様は前に出過ぎだ！ 何だあの戦いは！ 近接戦における成果と成績が優秀である事は認める。だが戦場を舐めているのか？ あんな戦い方では命がいくつあっても足りんぞ！ 今回の相手は戦闘車両と航空機を幾つか所有しているだけの相手だった、そこまで踏み込んで戦う必要はない。牽制しつつ接近すればそれだけで制圧できた相手だ——無駄なリスクを負わずに兵士と知って徹せ！ 英雄にでもなったつもりか！」

それは、違う。英雄にはなれない。英雄には届かない。シャアの動きを見れば解る。アレは生まれ持った天賦の才を發揮しているのだ。どんなに真似をしても英雄に届く

事は出来ない。でもあの強さ、あの輝きに魅せられてしまったのだ。だから、自分はどこまでも行きたい。殺していきつける力の果てへと進みたいのだ。じゃないと英雄を殺せる領域へと届かない。英雄を殺す？ そう、そうだ。英雄になりたくないじゃない。

強大な力を持った英雄を殺したいんだ。

あの凄まじいまでの魂の輝きを、熱量を持った者を、自分の様な凡俗が地に降り、すり潰すように殺すのだ。きつと、きつとそれは酷い事であるに違いない。だがきつと、英雄への挑戦以上に、意味のある事に思える。それこそ今までの自分の人生で感じる、一番意味のある事にすら感じる。シヤアは味方だ。殺せない。だから連邦の英雄と戦って殺したい。きつとそれには地位が、そして武勲が必要だ。もつともつと殺して、連邦軍の地で大地を赤く染めればいいのか？

「貴様、人の話を聞いているのか！」

「ハ、申し訳ありません」

「口で応えればいいつてもんじゃないんだよ貴様ア!! いいか、ガルマ・ザビ大佐より兵を預かっている私には、貴様等全員を生かして返す責任があるんだ! これ以上の独断専行は許さんぞ! 武勲が欲しいのであれば次の戦場からは俺と一緒に来い、貴様に殺し場を俺が与えてやる、だから無駄死にする様な真似はやめろ、いいな!」

「ハ、了解しました」

背筋を伸ばし、腹から声を出して敬礼を取る。だが上官殿は溜息を吐く。

「見た目と聞こえさえ良ければいいという訳ではないのに……はあ、もういい。さつさ
と行け……貴様には何を言っても無駄そうだしな……はあ……」

そう言つて解放されたので、歩き、そして上官から離れる。話している内容から上官
が優しい人物、いや、部下思いである事は良く解る。このジオンの兵全体を見ても、今、
自分は指揮官に恵まれているのだらう。だけど、それでは駄目なのだ。もつとゴミの様
に使い捨てられなきゃいけない。今はまだいい、だがこれからジオンと連邦の戦争は
増々激しく、そして泥沼になつて行く。それは半ば予感でありながら、確信だった。宇
宙と地上の戦争、これはどちらかの人間が滅ぼされるまで終わる事のない戦いになる。
複雑な事は解らないが、

それでも終わりのない戦いである事は解った。

人はきつと、何処までも憎しみ合つて、お互いに殺し続けるのだらうと。

でもそれでいいのだ、解り合つて、全員が手を繋いでいる人類なんてきつと人類じゃ
ない。愚かで、独善的で、傲慢で、偽悪的で、強欲で、嫉妬深く、優しく、そしてどう
しようも救いが無い。生まれてきた時点で先の見えない世界にいる、終わりが確定して
いる生物として生を受けてしまっている。人間はどうしようもなく救いがなく、そうい
う生物なのだ。そういう人間らしさを自分は好んでいる。逆に言えば、そういう人間ら

しさのない存在は吐き気がするのだが。

吐き気がするだけ。

特に何かをするわけではない。

兵士なのだから。

命令されない限りは誰かを殺すわけでもない。

「……寝るか」

振り返れば焚火に集まって話し合っている戦友たちの姿が見える。だけど何時だろうか、戦友達が——全員同じように見えてきたのは。誰一人として、顔の区別がつかない。上官も声と服装で漸く上官だと解る。誰もが結局は同じ人物の様に見えてくる。話していて違う人物だというのは解るが、それでも誰もが根っここの部分では一緒、ただの人であり、兵である。それ以上でもそれ以下でもない。所以誰もが一緒に見えてきた。

語り合おうとも、それを楽しいと思える心はどこかへとすり抜けてしまった。

「コクピットで寝るか」

いい、そこがいい。死ぬのはおそらくその中で、そして最も安心できるのもその中。誰と話しても一緒、誰を見ても一緒。だからこそ、あの宇宙で見た姿は脳に焼き付く。あの赤い彗星、あれだけは違う色と形をしていた。他の皆とは違う、ちゃんと個人とし

て見る事が出来た。

できたらまた会って、そして共に戦いたい。

だけど、きつと、連邦にもいるのだろう。

他の者とは違う、個人として認識できるほどに突き抜けている“個”が。

きつと、そういう連中と戦い、殺せば、前へと進めるのだ。

結局の所、戦い、殺し、そして昇進する事——それが兵士の全てなのだから。